三富

▲中富小学校屋上からの風景

緑豊かな三富を歩いてみませんか

中富小学校の屋上に上がると、整然と区画された畑地とその奥の美しい平地林が一面に見渡せます。

中富・下富地区は、江戸時代に計画的に開発された地域で、規則的に配置された畑地や平地林は今日までその姿をとどめ、それらは四季折々に変化して、美しい景観を醸し出しています。

今回は、三富地域の歴史や散策スポットなどを皆さんにご紹介します。

※問い合わせ　文化財保護課（☎998－9253・FAX998－9128）

三富のいわれ――

所沢市の中富と下富は、三芳町の上富（かみとめ）とともに三富（さんとみ、またはさんとめ）と呼ばれ、江戸時代に川越藩主の柳沢吉保が家臣に命じて行わせた新田開発によって開かれた地域です。

「富」の文字は、『論語』の中の「是を富まさん」の言葉を引用して3つの村名に付けられました。

三富地域は、江戸時代の開発新田の姿をとどめているということで昭和3年に埼玉県の文化財に指定されました。

現在の三富は――

三富地域は、近年、農業や環境の面でも注目されています。伝統的な農法を循環型農業として見直す動きや、美しい平地林を残そうという市民のボランティア活動も盛んです。昨年は農林水産業に関連する文化的景観地域に選出されました。また最近では、隣接する川越市、狭山市、大井町も含めた3市2町を三富地域とし、埼玉県とも協力しながら農業振興や地域づくりが進められています。また、昨年度からは埼玉県と3市2町による三富巡回文化財展も開催されています。今年度は「三富の四季を描く」と題して子どもたちの描いた三富の風景画が巡回展示されます。所沢市は2月の予定です。

三富の開拓と農業――

三富は、それまで原野であったところを、元禄7年（1694）、当時の柳沢保明（後に吉保）が家臣の曽根権太夫らに命じて開発が始められ、2年後の同9年に完成しました。総面積は1、400ヘクタールに及び、開発当時の家の数は3村併せて170軒にのぼりました。

三富の開発は「富の地蔵様」周辺の「地蔵林」を中心に行われ、まず最初に幅6間（約10・8メートル）の道路が縦横に造られました。その道路に面して間口40間（約72メートル）、奥行き375間（約675メートル）、面積約5ヘクタールの区画を農家1戸分として短冊状に区切り、道路側から屋敷、畑、山林というように配置されました。

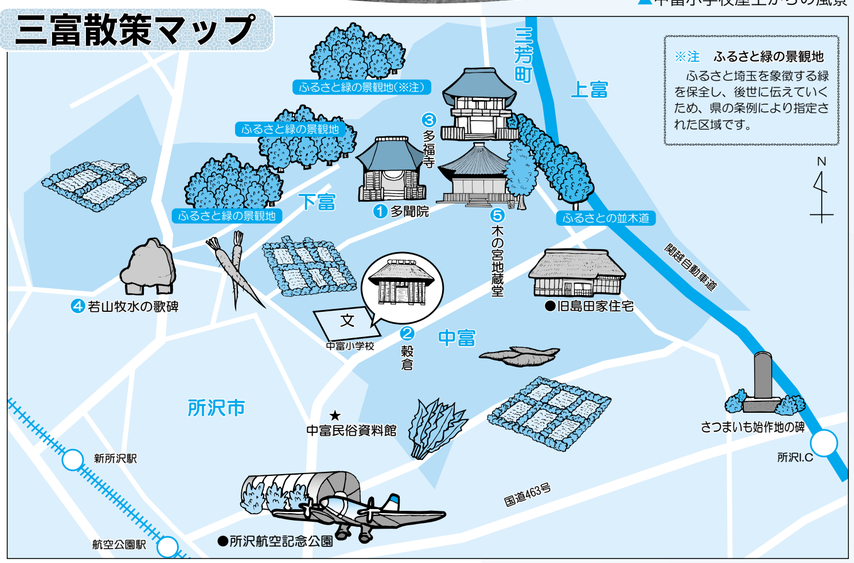
三富の農業は、その区画の中で、肥料や燃料を調達するという循環型の農業に最大の特徴があります。こうした三富の伝統的農法は、現在、循環型農業として高い評価を得ています。「富のいも」として知られる川越いものほか、ほうれん草や里芋、ごぼうなどのさまざまな野菜が生産されています。

また、三富には開拓農民のこころのささえとして柳沢吉保がつくらせた善提寺と祈願所があります。「多福寺」と「多聞院（毘沙門堂）」がそれですが、2つの寺院は今も当時の面影を伝えています。

＊　＊　＊

ぜひ一度、三富の自然と史跡を訪ねてみませんか。新しい三富の一面にも出会えるかもしれません。

三富散策マップ



中富民俗資料館

所在地　中富1547（三富散策マップ★参照）
電　話　942-4843
開館日　毎月第1・4日曜日と第2・3金曜日
開館時間　午前8時30分～午後5時

開拓者の精神を今に伝える道具の数々

中富民俗資料館は、昭和47年に中富小学校の改築記念事業として、校庭にプレハブ校舎の払い下げを受けて創立したのが前身です。

その後、地元の人々によって中富郷土民俗資料保存会が結成され、昭和56年に三富開拓地割遺跡にほど近い現在地に移転しました。館の運営は保存会の方々によって行われています。

農家の暮らしを再現した部屋

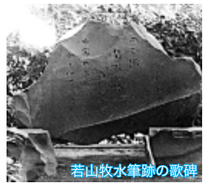
展示室は、本館と新館からなっています。本館は、クワやカマなどの小型農具、チャムシキやセイロなどの製茶道具、食器や文具などの生活用具、養蚕用具や人形などが各コーナーに区分展示されています。また、新館はトウミやマンゴク、脱穀機などの大型農具と衣服などが展示されています。

種類、点数ともに実に豊富で、その数は何と2,000点以上にもなります。さらに本館奥には、農家の暮らしを再現した部屋があるのが特徴です。三富散策の際にはぜひ訪れて、かつての三富地域の人々の生活に触れてみてください。

チャムシキ

シチリンとヘッツイ

④若山牧水の歌碑



若山牧水筆跡の歌碑

下富交差点近くには若山牧水（1885～1928）の歌碑があります。

牧水は宮崎県出身ですが、祖父の若山健海は現在の所沢市神米金で生まれました。

早稲田大学に入った牧水は、在学中に祖父の生家を何度か訪ねています。歌碑は、牧水の没後50年にあたる昭和53年に建てられました。

碑面には、次のような歌が刻まれています。

のむ湯にも焚火の煙匂いたる　山家の冬のゆふけなりけり

この歌は『渓谷集』（大正7年刊行）の「秋父の秋」に収められた一首で、残念ながら所沢でつくられた歌ではありません。しかし、のびやかでほのぼのとした筆跡は、機械彫りながら牧水のものです。牧水自身の筆跡の歌碑は全国的にもめずらしく、埼玉県内で5基あるなかでも神米金のものだけだということです。

⑤木の宮地蔵堂（三芳町）

木の宮地蔵堂

「富（とめ）の地蔵さま」と呼ばれ、地域の人びとから親しまれています。創建年代は定かでありませんが、口伝や由緒書によると「坂上田村麻呂の蝦夷征伐」に由来しているといわれています。

現在のお堂は江戸時代の建築で、内部の格天井には107枚の山野草が描かれています。「子育て地蔵」「縁結び地蔵」として近在の信仰を集め、4月23日・24日の春の祭礼と、8月23日・24日の夏の祭礼には大勢の人が集まり賑わいます。

境内には「甘藷先生の碑」なども建っています。

③多福寺（三芳町）

鐘楼の梵鐘

多福寺の山門

正式には三富山多福禅寺といい、臨済宗の寺院です。元禄9年の創建で、江戸麻布の東北寺隠居であった洞天恵水禅師が招かれて開祖となりました。境内には、本堂や庫裏のほか、山門、観音堂、穀倉などのたくさんの建物があります。

鐘楼の梵鐘は、創建当初から残っているもので、均整のとれた優美な形をとどめています。

なお、墓地には中富出身の哲学者田中王堂（1867～1932）の墓碑があります。

②旧田中家の穀倉

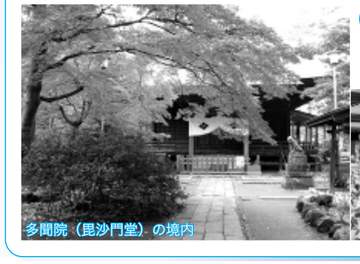
移築した旧田中家の穀倉

江戸時代の穀物の貯蔵施設です。所沢では「コクバコ」と言い習わされ、「コクビツ」や「ヘエゴク」とも呼ばれます。

中富の田中家にあったものを、平成12年に現在の中富小学校の一画に移築しました。

この穀倉の建造は、200年以上前と推定されています。間口が5メートル、奥行きが3.3メートルで正面1か所に引き戸の出入り口が設けてあります。内部は中央・左・右と3つに仕切られ、柱には溝が掘られて貯蔵する穀物の量に応じて仕切り板の枚数を加減するようになっています。

①多聞院（毘沙門堂）



多聞院（毘沙門堂）の境内

境内に咲く牡丹の花

元禄9年、多福寺建立のあとに毘沙門天社とともに建てられました。真言宗の寺院です。境内には毘沙門天をまつった毘沙門堂があります。毘沙門天は、柳沢吉保の出身地である甲州（山梨県）の武田信玄の兜の守り本尊でした。

現在の毘沙門堂は、明和3年（1766）に建てられたもので、江戸時代中期の御堂建築として貴重とされ、市の有形文化財に指定されています。

毎年5月には寅まつりが開催されています。また、この時期は、約300本の牡丹が咲き乱れ、花の寺としても親しまれています。